

掘立柱建物跡を2棟確認

曲輪の北端では柱穴が密集して検出されています。柱穴が密集する範囲は東西22m、南北14m以上に広がっています。大きさなどから、この曲輪での主要な建物の柱穴と考えられ、何度も建て替えられていたようです。

特に、切岸直下の場所には3間×3間の総柱建物が想定されます。これらの柱穴は他のものより深く、硬い岩盤の場所を選んで掘られていることから堅固な建物が建てられていたと考えられます。この総柱建物は、詰の礎石建物と同じように東西南北の方位に沿うように建てられています。

また、この建物の東側でも方位に合わせて柱穴が並んでおり、付属する建物と考えられます。



盛土による曲輪の成形

曲輪の縁辺部は、岩盤を削った土砂を盛って成形し、広大な平坦面を作り出しています。

もともとの山の地形と盛土との境には黒色土の堆積が確認できました。

盛土の断面を観察すると、質の違う土を何層も重ねており、一番外側の層には岩盤を砕いた土を盛ることで崩れにくくしている工夫がされています。

